

“考古フアンのじゃれごと”③

日本先史古代研究会 会員 山崎泰二

湊茶臼山古墳の埋葬者を想定する

所在地＝岡山市中区湊 （操山丘陵南部の山頂）

古墳の形＝前方後円墳 墳長＝約 120m以上 後円三段・前方二段築成

築成年代＝5 世紀初頭 現説＝平成 22 年 12 月 23 日

最大の特徴＝中心埋葬が存在しない未完成古墳

発掘者＝岡山市教育委員会

1. 湊茶臼山古墳のこと

平成 22 年の年末に地方紙の山陽新聞では 1 面記事でその他の全国紙にも大きく掲載され考古フアンをうならせる大きなニュースとなった。かねて岡山市の教育委員会が学術調査をしていた湊茶臼山古墳の第 3 次発掘成果が発表された。我々の仲間も説明担当者の安川満先生の解説を傾聴した訳である。この古墳の築造期が 4 世紀末と想定されていたものが 5 世紀初頭に変更になったのは詳細な調査の結果であり、その頃この界限では 100m 前後の古墳として、金蔵山 (165m) 神宮寺山 (150m) 網浜茶臼山 (92m) がいずれも初期の前方後円墳として存在する。少し間を置いて 5 世紀前半には日本第 4 位 (築造時日本最大規模) の造山古墳 (360m) (周濠あり＝22 年度岡大により発掘) が吉備の中枢部に築造される。3 世紀中国の文献魏志倭人伝に登場した邪馬台国はその後しばらく文献から姿を消している時期が西暦 400 年前後でこの湊茶臼山古墳の築造に該当する。

安川担当官の説明の概要は下記の通りである。

- ① 古墳の主体となる埋葬の痕跡がない。
- ② 未完成の全国規格の前方後円墳である。埴輪が部分的に出土して古墳としては未完成のままである。
- ③ 寿陵 (古墳の主が生前から作る) の可能性が高い。

新聞の報道記事によると、専門家の学者のコメントが添えられている。

- ① 茨城大名名誉教授の茂木雅博先生＝「不慮の死」のため主体埋葬がない。
- ② 岡山理大の亀田修一教授＝「不慮の死としながら、吉備勢力内外で起きた異変を反映」
- ③ 岡山大学の松木武彦教授＝「古墳造りのルールが変わり予定通り築けなかった」として暗にその直後により大規模な造山古墳築造に着手しなければならない政治的意図を想定する。
- ④ 岡山県古代吉備文化財センターの宇垣匡雅総括副参事＝「例えば朝鮮半島で繰り返された倭と高句麗との戦いで死亡した遺体を持ち帰れないで、埋葬できなかった可能性もある」
- ⑤ 作陽大学の沢田秀実准教授＝「生前に墳丘を築き、埋葬時に葺石や埴輪を整備するなどの古墳の築造過程が見えてきた」

など諸説が紹介されている。岡山市教育委員会の見解では

「この古墳は何らかな事情で古墳の主が埋葬されなかった可能性がある」とした上で、問題点として

- ① 古墳時代の研究では、埋葬祭祀は「王権」の継承儀礼でもあったと考えています。ではこの古墳に埋葬出来ない理由は何であったのでしょうか。
- ② 古墳の築造・整備と埋葬祭祀の関係です。古墳は生前どこまで準備しておき、埋葬に伴いあるいは埋葬後に何を整備するのか。

との見解を示した。

当然のことながら考古フアンとしては学者の公式見解だけでは物足りなさを感じる。そこで紀元 400 年前後の年代で、先人の示した資料や諸説を参考に私の見解を纏めてみたい。

2. 当時の列島（朝鮮半島と日本列島）界隈の状況

弥生末期から古墳時代の初めの日本列島では、その前段に中国南東部の江南人が新天地を求めて、朝鮮半島経由など色々な方面から水耕稲作（乾田方式＝現代の農法と同じ）技術を持ち込み、九州島北部から数百年の内に日本列島を優秀な稲作文化圏にしています。水耕稲作により連作障害を克服し乾田方式で水の管理がやりやすい日本列島は、稲作発祥の地である中国の江南地区に比べても格段の収穫量が増えます。当時すでに食糧の 60%はお米であったことが、土器による炊飯を研究している北陸大学の小林正史先生は平成 23 年 1 月 16 日の講演で述べておられます。「稲の育て方」の新技术は「土器による炊飯」により豊かな食生活をもたらし、中国北部や朝鮮半島に比べ日本列島では急激に人口が増加し東北地方まで席捲してしまうのです。生産者の食糧は十分に確保され、余剰米は風水害の不慮の災害用の貯えになり、海人による近隣諸地方との交易使われ、活発な交流の源になったのです。

弥生人（日本列島特有の人種で我々現代人も同じ系統といわれています）の農耕民にとって最も必要であったことは、自然現象の的確な把握でした。具体的には稲作の植え付けや収穫にかかわる天地異変の予知は彼らの生死を左右します。大陸を移動する遊牧民である騎馬民族は、夜の星を見て移動し、昼の太陽の昇り降りて季節を知り、雲の動き一つで天候の異変を予知できたのです。西から移動してきた騎馬民族は大陸の東端に来て、朝鮮半島の農耕民と合体します。我々の先入観では騎馬民族はその機動力で元から居た住民を侵攻・略奪をし、相手を殲滅すると信じていました。中国人はそれを恐れてあの長大な「万里の長城」を築き自国を守ったと教わりましたが、江上波夫先生（騎馬民族征服王朝説論者）は佐原眞先生（古代史学者）との対談の中で「騎馬民族は多彩なバリエーションの持ち主」とした上で異民族と合流したとき、自分たちの得意な文化＝天文知識などを駆使して相手を敬服させ、その後は相手に合わせて「合体」する「啼くまで待つ・・・家康タイプ」だと語っています。先住民を良い方向に先導する支配者として定着するのです。人種としては圧倒的に農耕民の弥生人が多く渡来＝外来系の彼らは人種的にも倭人＝弥生人に同化してしまいます。初期ヤマト政権の担い手として、その後の大和政権に大きな関わりを持つこととなります。

今の北朝鮮や旧満州周辺で力を蓄えた騎馬民族は夫余族と同化し高句麗朝（前 37-668）が中国の三国志時代の国々と対峙しながら朝鮮半島の覇者を目指して南下してまいります。説によると日本列島に移住する以前に多くの倭人が朝鮮半島に住んでいましたが、勢力拡大の過程で九州島北部から列島の先住民になっていた農耕民族の弥生人と同化して来るのもこの時期なのでしょう。その頃の朝鮮の南部は三韓時代と称していました。後の百済＝馬韓・新羅＝秦（辰）韓・任那＝（倭国）は弁韓であります。任那弁韓はその後ヤマト政権の一部として歴史に残ります。余談ですが、今の朝鮮民族は主に韓国と北朝鮮それに旧満州の中国の 3 カ国に分離しています。大陸に接続している宿命なのかもしれません。古代の朝鮮も大国＝中国や蒙古族に常に侵食・圧迫され時には倭人の支援を受けていました。余談ですが日本が百済を支援する形で唐と新羅の連合軍と戦った白村江の戦いに破れ、百済は滅亡し朝鮮は新羅が支配し、倭国の朝鮮における拠点を失うのは西暦 663 年のことであります。天智天皇がまだ皇太子の時代です。

3. 好太王碑が史実を示す

私の手元に昭和 59 年（1984）7 月 28 日付の朝日新聞の一面トップ記事と 3 面の解説記事の切り抜きなどが数枚あります。当時は中国の北朝鮮近くに存在する「好太王碑」に日本人が近寄ることが大変困難な時代に現物を見た記事が大きく報じられたのです。この好太王碑は今から約 1600 年前の西暦 414 年に古代朝鮮の高句麗王がその 2 年前に亡くなった、父である好太王（高句麗王朝 19 代）（374-412）

の功績を讃えるために建立したもので、実物を見た関東学院大学の山田宗睦教授（昭和 60 年当時）は「高さ 6.4m で側面は 1.5m 幅の 3 面と 2m 幅の 1 面計 4 面に 1775 文字（当然漢字）が刻まれていて、当時 1600 年の風雪で痛み、その上プラスチックの補強がされ拓本を取るために塗られた石灰の残りのため判読は大変困難と報じています。碑は共和国吉林省通化市集安市にあります。



好太王碑

しかしこの碑文は史実直後の文章で、かの有名な中国の魏志倭人伝の 2000 文字に匹敵する文献として高く評価されているものです。この好太王碑については、大きく二つの側面を持っています。

- ① 碑文の内容（当時の日本のことを記録している）
- ② 旧日本軍（先の十五年日中戦争＝第 2 次世界大戦）による「改ざん説」として扱われた不幸な出来事。（今回はこの件は省略する）

碑文の内容は三部構成で、その第 2 部に好太王の業績を賛美した部分に、倭（日本）が登場します。順を追って説明します。

- ① 倭が辛卯年（391）海を渡って百済を討って臣下とした。
- ② この為、高句麗は百済と親交があったので、倭を攻めた。
- ③ 399 年百済は（高句麗との）誓いを破り倭と通じた。そこで王（好太王）は平壤に出向いた。
- ④ その時新羅から使者が来て「倭人が新羅に侵入し、王（新羅王）を臣下としている」と救援を求めた。
- ⑤ 400 年好太王は 5 万人の大軍を派遣して新羅を救った。
- ⑥ 新羅の王都にいた大勢の倭軍が退却するのを追って任那・加羅（両国とも倭の一部＝朝鮮半島南部）に迫った。
- ⑦ 倭は 404 年にも帯方（黄海道）に進入。王はこれを討って大敗させた。とあります。わずか 13 年間の出来事です。驚くばかりの事件です。当時の倭の力のすごさが推測されます。別の説によると、当時百済と新羅は倭国と同族であり、お互い身内同士であった説も有力です。

高橋護先生（元ノートルダム女子大の教授）は平成 3 年 3 月 23 日の講演で、この好太王碑文を取り上げて造山古墳の築造者が生存していた時期に重なり、魏志倭人伝以来しばらく途絶えていた中国の歴史書の宋書夷蛮伝に「倭の 5 王＝讚・珍・濟・興・武」が正史に登場します。倭の 5 王の最初の「讚」より一代前の倭の大王の時代が、高句麗の好太王と戦った人物ではないかと推定なさっています。

日本の歴史の中で西暦 400 年前後のことは、はっきりしていません。学者によっては先述の好太王碑から、すでに当時倭国にヤマト政権が存在し朝鮮半島に出兵したとの論も存在します。私は倭人が百済や新羅に出兵したのは事実としても「ヤマト政権が海外に出兵した」とは思いません。理由もなく搾取のために出兵するほどの政権が当時の日本列島には確立していないと思うのです。4 世紀前後倭人は北九州・朝鮮南部（任那＝加羅・弁韓・倭国）そして出雲・吉備、ヤマトに展開し同属の関係にありました。特に吉備の海人は稲作の豊富な富を背景に、これらの仲間と共存して活躍していました。朝鮮南部は自分たちの古里であり同族であるばかりではなく、朝鮮半島から産する原料の鉄の入

手できる重要な仲間が存在していたのです。その仲間を護るため当然のこととして新羅を守り百済を守ったのです。

一方夫余の満州族を含む朝鮮族である高句麗から見ると、後進の倭人が水耕稲作の技術で大きな成果を上げ大勢力になることは認め難くないのは、ある意味で当然のことでしょう。当時のヤマトは大国中国と国交を断ち、独自の建国に向けて力を蓄えていた時期でした。倭の王権が徐々に確立している頃です。

その頃吉備の操山の丘陵では 100mから 150mの前方後円墳が次々と築かれていたのです。すぐ眼下に吉備の穴海が展開し、豊富な魚介類も獲れ、背後の西の大川（今の旭川）による水の恩恵を受けた田圃が広がり稲穂が富を約束してくれています。遠目でも白い葺石の湊茶臼山古墳などが林立する様は、今日の岡山の高層ビルを上空から眺める比ではなかったと思われます。これらの古墳のすぐ後には造山古墳が巨大な姿を現します。大本組の試算では延べ 150 万人もの人材が投入された日本列島最大のモニュメントが造成されます。逆算すると湊茶臼山古墳クラスだと 4~5 万人が動員されそれが次々と少なくとも 4 基は築造されるのです。吉備の富の懐の深さが伺い知れるところです。畿内勢力を圧する大きな力が吉備に存在していたのでしょう。日本列島を取り巻く倭人集団の中で突出してその果たすべき役割も大きく、朝鮮半島南部の同族を助けに行ったとしても不思議ではありません。吉備は鉄の加工（鑄造・鍛造）技術の専門家集団です。原料の鉄を求めて真っ先に吉備の海人が中心になって、余剰のお米を中心に物資の支援が出来たのは、湊茶臼山古墳などを造った吉備の首長たちしか行くことは出来なかったと思います。

学者は当然のことながら慎重でなければなりません。先に紹介した諸先生の申しておられる中で、宇垣匡雅先生の評論は我々にとって最も示唆にと富む教示であります。私は平成 22 年 12 月 23 日に行われた岡山市教育委員会の湊茶臼山古墳第 3 次発掘現場説明会を聴き、すでに 25 年も前の好太王碑の新聞記事や高橋護先生の講話を総合して、古墳時代の初期にヤマト政権が産声を上げ、「吉備の祭祀」が基になり箸墓古墳の墓制として形作られたヤマト政権の一翼を、吉備の入り口で一番見栄えのする場所に築いた湊茶臼山古墳に埋葬されなつた首長のアクシデントが好太王碑に残された史実と重ねて見る事で、「考古フアンのじゃれごと」と致します。



5 世紀の朝鮮半島



湊茶臼山古墳の山陽新聞記事 2010. 22. 12. 15